

日本看護歴史学会

會報

日本看護歴史学会
第21号
1995年9月20日

雑感——第九回学会に参加して

高嶋 妙子

久しぶりに故郷でこころゆくまでリフレッシュできたような、そんな満たされた思いで帰宅しました。

ゆったりとした雰囲気の中で、しかし中身は密度濃く、第九回学会も大成功でした。

顧みまずと私自身は、第四回大会以来の参加で、会費納入はしていますが、歴史的には幽霊会員として、歴史という言葉への郷愁だけで在席させていただいています。

看護史研究者として、その道一筋を歩み続けた夢は、今のところ遠退いてしまいました。このような場でテーマに没頭していらっしやる方々に出会うと、かつての夢を捨ててはいない自分に気付かされます。分科会の話提供

者の苦労話にはたまらなく気がそそられました。

懇親会でも少し言いましたが、昔ほんの僅かでも歴史学に触れ学んだことを役立てて、私は管理を実践してきたと思っています。大学の通信課程で史学科に学んだことを指すのですが、卒業論文の「わが国における職業看護の芽生え」はともかくとして、これでもかこれでもかと「歴史学」を学んだ印象が強いのです。堀米庸三の「歴史をみる眼」(NHKブックス)のはしがきの中の一節が思い起こされます。

「過去の総体としての歴史は、人間の理解を絶した無である。しかし、人間はこの無を限定し、そこに意味を求めずにはいられない。

なぜならば、自からの完全なる無意味さに耐えられる人はなく、又、人生を意味づけるには、そのまえに、世界を意味づけなければならぬから。もちろん、その意味づけには宗教的な、また哲学的な方法もある。しかし、歴史的なそれもまたわれわれの根本的欲求にもとづく方法である。」

組織も生き物であることはあらゆるところで実感するのですが、そのままにすれば流れてしまいきます。意識的にそれを拾うことを歴史学から学んだと思っています。

誰でも自分が所属する組織が成長し、それが意味あると思えたらそれまで以上に組織への愛が深まるものです。この意味づけをするのが管理の役割であると捉え、二〇余年実践してきました。創設期からの活動を残されていた資料(史料)から辿って、意味を見出し自分たちもその都度の事には必死で取り組みながら、それが過去になる。また改めて見詰め直し、意味づけました。それを繰り返しながら、過去を現在に役立て、これからの道も見付けてきました。

歴史学との出会いがなかったら私はどんな管理をしていたのかと思うとぞっとするほどです。その時々夢中になったことが

五〇代半ばを過ぎるとみな生きてくるものなのだなという思いを強めている今日この頃なのですが、これを統合というのかという感じは、

歴史研究は全く手がけていませんが、益々日常の中に歴史を意識して生きながら、「歴史に問うことは、やがて歴史に自らを賭けることである」(堀米庸三)という歴史観に共感できるまでになっているのですが、これが名のみの会員で居ることへの釈明になりますでしょうか。

それにしても、「戦後の看護改革」をお話頂いたお二人のお若いこと、そして昔からお強かったこと。歴史の真実の生き証人としてだけでなく、激動の時代を自らの安全も顧みず、看護職としての使命を全うされた人となりとその生きざまを、書き残さなければならぬと思えました。女性解放の歴史と切り離すことの出来ない看護の歴史ですから、新時代を切り開いた女性の個人史が一層重要ではないかと考えました。

また制度問題が表面化しはじめた中で、今はもう誰の所為にもできないのだという思いを噛みしめています。さて、職能の力は強くなったのでしょうか。

第九回大会報告

代表幹事 亀山美知子

八月五・六日の両日、京都市女性総合センター「ウイングス・京都」を会場に、第九回大会を開催しました。今年が戦後五〇年の年に当り、本会もまた「戦後五〇年看護改革の行方」をテーマに、当時GHQ(連合軍総司令部)に直接関った、金子光氏、大森文子氏、および地方改革に携った新井サダ氏(埼玉)、岡部登美子氏(京都)、高岡スミ子氏(福井)と、いづれも貴重な証言を得ることが出来ました。会場からも活発な発言があり、従来にも増して活況を呈しました。

会員による研究発表では、岸本多恵子氏「太平洋戦争時、陸軍病院に設置された看護婦生徒教育隊の実態をさぐる」他二題が発表され、特に岸本氏の報告ではこれまでの看護史上にも殆ど明らかにされていらない貴重なものでした。分科会は会員・非会員の自由参加により実施され、相互に啓発を得られる機会となったと信じます。第九回大会は好評のうちに閉幕いたしました。参加者各位の御協

力に心より感謝いたします。

尚、今後もメインテーマにそった企画を展開したいと思いますが、それ以上に会員諸姉の研究者としての資質の向上に期待いたします。次に第九回総会では、前年度の方針であった学習会の開催は十分実施されぬままとなっており、今年度は各地で実施する予定です。また、第一〇回大会は本会の一つの分水嶺と考え、従来、開催地は大都市圏中心の傾向がありましたが、地方都市での開催を決定し、山形市での大会の実現をめざします。

尚、今年度は幹事の改選期に当りますので、別記の通り幹事選挙の公示を行ないます。幹事は一〇名で任期は三年です。新幹事は来年八月より任に就くこととなります。

最後に会費納入のお願いを重ねて申し上げます。五月二〇日付で三三名の五年以上の滞納者の方を名簿より削除いたしました。本会の運営は皆様方の会費収入によって成り立っておりますので、御理解、御協力を重ねてお願いいたします。

◆第一〇回大会予告

会期 一九九六年八月三日(金)
二四日(土) 山形市内

日本看護歴史学会 1994年度会計報告

収入の部		(単位 円)	
項目	予算額	決算額	差し引き額
前年度繰越金	436,650	436,650	0
会費	600,000	794,940	194,940
		会員 172口 新入会員27口	
寄付金その他	30,000	162,684	132,684
		会誌等売上(67,470) 利息(5,214) 広告料(35,000) 寄付金(55,000)	
合計	1,066,650	1,394,274	327,624
支出の部		(単位 円)	
項目	予算額	決算額	差し引き額
事務経費	240,000	225,998	14,002
印刷費	(40,000)	(20,740)	
通信費	(150,000)	(123,303)	
文具、その他	(50,000)	(81,955)	
幹事会開催費	150,000	129,464	20,536
出版費	300,000	244,110	55,890
会報発行費	(100,000)	(84,460)	
		19号 41,200 20号 20,600 21号 22,660	
学会誌発行費	(200,000)	8号(159,650)	
会員名簿費	0	0	0
総会費	50,000	50,000	0
分科会費	20,000	7,020	12,980
予備費	306,650	0	306,650
合計	1,066,650	656,592	410,058

会計監査 大林 春子 ⊕ 徳川早智子 ⊕

日本看護歴史学会 1995年度予算案

収入の部		(単位 円)	
項目	予算額	摘要	前年度決算額
前年度繰越金	737,682		436,650
会費	600,000	150名×4,000	794,940
寄付金その他	50,000		162,684
合計	1,387,682		1,394,274
支出の部		(単位 円)	
項目	予算額	摘要	前年度決算額
事務経費	280,000		225,998
印刷費	(40,000)		(20,740)
通信費	(160,000)	会報 3回 学会誌 1回	(123,303)
文具、その他	(80,000)		(81,955)
幹事会開催費	150,000		129,464
出版費	300,000		244,110
会報発行費	(100,000)	年3回	(84,460)
学会誌発行費	(200,000)	年1回	(159,650)
会員名簿費	100,000	1回/3年	0
総会費	50,000		50,000
分科会費	20,000		7,020
予備費	487,682		
合計	1,387,682		656,592

※今年度会計監査 松田比佐子、高橋 典子

分科会報告

担当者 五十嵐 節、高田 節子

会報二一号で話題提供者を募集し八人の申し込みがあり、八分科会を開催した。各分科会への参加者は七人から多くて三〇人で前日の特別講演者である金子光先生、大森文子先生も加ってくださった。分科会では四五分間の報告・質疑応答後一堂に会して各分科会のまとめを発表し意見交換した。各分科会の概略は以下の通り。

「ナイチンゲール」話題提供者吉川龍子氏「明治期の家政書にみられる『看護覚え書』の影響について」明治期の家政書『家事要法』（明治一四）に『看護覚え書』からの引用が見える。刊行からわずか二〇年余り後に、日本にも一般女性用の単行本にナイチンゲールの影響が伝っていたことが判明したなどの報告後、意見交換。「制度史」話題提供者滝内隆子氏ほか。「府県別産婆規則等の制定状況と規則内容について」医制発布以降全国統一法規である明治三二年の産婆規則制定までの府県別産婆規則等の制定状況は資格・免許・鑑札・業務・罰則に関する規則、教育に関する規則、試験に関する規則、産婆の組合と教育に関

する規則に大別できたなど報告。「各国史」話題提供者田中幸子氏「日本の看護改革と朝鮮の看護改革」。日本の看護改革との類似性がみられる。占領期（アメリカ軍政期）に保健厚生部（日本の厚生省）から文教部（日本の文部省）へ管轄が移行。アメリカ軍の直接的な影響力が大。大韓民国成立後も軍の力で維持されたことなどの報告と意見交換。

「看護教育史」話題提供者高橋みや子氏「日本の近代産婆教育の開始について」。産婆教育がはじまったのは東京では明治一〇年、山形では明治一三年。山形独自のものが同一六年で教育内容は『朱学産婆論』をもとに東京で行われていたのと殆ど同様。山崎トミ子氏は東京で産婆免許をとり宮城で産婆教習所を開所など報告の意見交換。「仏教と看護」話題提供者檜原登志子氏。「光明皇后の母、橘三千年代と薬師信仰（その一）」橘三千年代の薬師信仰の歴史的位置づけにスポットをあて報告。国家的仏教政策ではなかったか。太子信仰との関係は？。なぜ薬師さんかなど

の意見交換。研究課題として今後は仏教であるいは政治学の歴史へと発展させる。

「病院史」話題提供者岸根滋子氏他「京都帝国大学医科大学附属病院開院当時における看護婦の職務について（その三）」当日研究発表した内容をベースに話題提供。発表内容に関連づけて看護婦の、特に看護管理の面から職務について深めたいとの希望により二代目の総婦長永井モトの史料（履歴書）を中心に検討を行なった。

「看護教育史」話題提供者岸本多恵子氏「太平洋戦争時、陸軍病院に設置された看護婦生徒教育隊の実態をさぐる―東部軍とよばれていた関信地区三施設の調査より―」研究発表の内容について質疑応答がなされた。看護（教育）史のなかでこの時期が不確かであったのでここにメスを入れた試みに感謝したとの意見が多かった。「保健婦の歴史」話題提供者福本恵氏「保健婦の歴史について」病院保健婦、山形県の保健婦教育と活動（三五年間継続した自主的活動グループ）、真島智茂の業績、業務基準、保健婦べからず集などについて発表、活発な意見交換がなされた。

日本看護歴史学会第九回大会 収支決算報告書

収支決算報告書	
(単位 円)	
〈収入〉	
大会参加費	五八二、〇〇〇
会員	七名×三、〇〇〇＝二一、〇〇〇
非会員	八名×四、〇〇〇＝三二、〇〇〇
	一名×三、〇〇〇＝三、〇〇〇
学生	七名×二、〇〇〇＝一四、〇〇〇
懇親会参加費(五名×一、〇〇〇)	五、〇〇〇
大会総会費	五〇、〇〇〇
寄付金等	六四、〇〇〇
合計	七四九、〇〇〇
〈支出〉	
講師謝金・お車代(五名分)	二七〇、〇〇〇
講師宿泊費(三名分)	三四、〇〇〇
講師食事代・接待費	一四、九四八
会場使用料(付属設備使用料含)	一六五、四〇〇
立て看板代(正面入り口)	一一、三六〇
懇親会費	六一、七四〇
事務・通信・雑費	二六、九三二
学生アルバイト(要三員一名×巨)	三〇、〇〇〇
合計	六一五、五三六
〈差し引き残高〉	
	七四九、〇〇〇－六一五、五三六＝一三三、四六四
〈累積残高〉	
前年度までの繰越金	五五九、三三八
本年度残高	一三三、四六四
累積残高	六九二、八三二
(会計 太平 政子、依田 和美)	

看護歴史との出会い

内田 卿子

今まで看護歴史に余り興味が無かった私が、僅かのきっかけと、素晴らしい人との出会いによって看護の歴史学会の活動を知り、始めて学会に参加をした。いみじくも京都の地で開かれたことも初参加の私にとって意味深かった。今年には戦後五〇年と言うことで特別企画の「戦後五〇年看護改革の行方」がメインテーマとして取り上げられていた。日本の看護がどう改革され今日に至ったかを振り返るのにとても良い機会であった。今まで経験をしてきた多くの学会が千人から二千人以上で、学会参加の度に聞きたい項目に沿って分散された会場をプログラム片手に、忙しく移動をし有効に時間を使わなければならないかった。しかしこの学会の会員数は二百八十人と聞く。会場も一つでまことに家族的な集まりであり、親しみを覚えた。興味を引かれたのは、金子先生と大森先生のお話であり、又翌日のシンポジウムであった。敗戦という困難な中で、二一世紀の看護を目指して、人々に期待される看護

職像と、看護の内容について、看護教育を始め、看護制度に取り組まれ努力され、様々な時代の流れのなかで、素晴らしい「看護の灯」を後輩の私たちに示された言葉に感動した。

戦後の看護大改革の時期、正にその渦中で私は模範高等看護学院の学生として、昭和二十一年に入学し日赤の方々と一緒に授業を受けたのである。懐かしいGHQの先生方のお名前が出る度に、あの戦後の荒れ果てた教室で、ひもじい思いをしながら実習し、教科書もなく通訳付きの授業を受けたことが思い出され、今日との余りの差に感慨一入であった。繰り返し教えられた言葉は「看護婦の教育は看護婦の手によって為されなければならない」であった。

分科会では制度の二グループに入れていただき、産婆規則制度の変遷について、先輩会員の皆様の詳しい内容分析の報告に、本当地道な研究でありながら、学会を盛り上げてきた先輩会員のご努力の一端に触れることが出来て素晴らしい経験であった。今、会員となれたことの喜びと共に先輩の皆様のご指導を頂き、歴史の認識を新たにしたいと願っている。

「歴史が語られる重み」

増田 心子

小学校四年生の夏休み、さつま芋の蔓の延びた炎暑の校庭を流れた一瞬の静寂、それは第二次大戦の終結を教えられた時である。

その後には復員し、自死した兄の言葉もあって看護を目ざした私には、第九回日本看護歴史学会のメインテーマ「戦後五〇年 看護改革の行方」の参加は逃せないという思いがあった。会場の「ウインクス・京都」は小公園に隣り合せ、庶民の集いの場所と思えた。

初日の特別講演「私のかかわった戦後の看護改革」は、コーディネーター草刈淳子氏、講師、金子光氏、大森文子氏である。質素なステージで、静かな語りから始まったが、徐々に熱気を帯びていった。

参加者も講師と同輩の方から、卒業間もない人まで、両氏の生きた看護改革史五〇年を、身を乗り出して聴いた。第二次大戦は両氏にとっては、青春のただ中で、終戦は二〇才代であったと思う。それからの五〇年、真に日本の看護の改革のために生きて来られたと

考えることができる。お二人の、大戦中の苦い体験は、戦後、GHQのオルト課長をはじめとする指導者の看護にける情熱、人間性に魅せられ、その知識の豊かさ、技術の見事さに、開眼させられる思いの中で、昇華されていかれたのではないかと思われた。お二人の戦後五〇年の、情熱的な取りくみは、あらためて生命をいづくしみに、人が人によって大切にされることに、心の底からの喜びに充されて支えられたようにも思えた。お二人は一時間近くも予定時間を越えた会場の質問に答えられた。

その一つの「日本の戦後五〇年の看護改革の評価を」に対して、金子氏は「見事に改革された。しかしまだまだの感も否めない。」との意味を述べられた。大森氏の「時かぬ種は生えぬ」の応えは、先づ、種が蒔かれることの大切さと、蒔かれた種の成長をゆだねた後輩への激励と課題と受け止めた。

二日目、会員の地道な歴史研究の姿勢に深い興味と感銘を覚えた。地方の看護改革の報告からも、当時の看護職が、一丸となった涙ぐましい足跡が甦り、社会の動きに先んじて、看護の改革が更に見られることが示唆されたと考える。

看護の火は永遠に輝く

尾崎百合子

「第九回日本看護歴史学会」の案内状に「戦後五〇年 看護改革の行方」とあった。戦後五〇年ということで色々思うところもあつたので、看護とは門外漢の私も、さそわれるままに、のこのこ会場のウイングス・京都まででかけた。始めに、金子さんと大森さんの講演があつた。

戦後占領軍がやってくる。女性の軍人も混じっていて、オルト大尉もその一人であつた。彼女はナースだったが、日本の看護実態を目にして、看護改革に取り組む決意をする。金子さんは当時、保健婦で、厚生省の技官だつた。どんな意見を出してオルト大尉に働きかける。看護についての熱い思いが二人を結びつける。

「診療の助手だけではなく、ケアを担当するのが看護婦の職務。そのためにも看護大学の設立や看護婦の地位向上が不可欠でした。」戦後改革が、単なる押しつけではなく、日本側の主體的な判断や行動と結びついて結実していったその経緯をはじめて知った。

戦前、戦中、戦後、常に看護の現場とかかわってきた大森さん。その口から、伝染病、栄養失調、

結核、マラリアなどの言葉がポンポン飛び出す。特に、戦後の困難な状況のなかでの活動が、彼女の実体験を通して、圧倒的なボリュームで迫ってくる。

軍関係病院を国立病院に改組するくだりに、市民に開かれた医療看護を実現しようと苦闘された、戦後改革の実践的な課題が表現されている。戦後の医療・看護の民主化はこのようないつ一つの実践のなかから紡ぎだされてきたことを忘れてはならないのだと思つた。

「歴史はそこにあるが、我々に問いかける力がなければ、それは何も語らない。」(草刈さん)という言葉から始まったディスカッションでは、八〇歳代の看護婦から、二〇歳代の大学院生まで、熱心な討論が繰り広げられた。歴史研究のなかで、戦後看護改革の光と陰が明らかにされていく。

わたしは今「看護の灯 高く掲げて」(金子光)を読んでいる。ケアがますます重要な時代の課題となつている今日、看護の社会的役割はまた、あたらしいフットライトを浴びつつあるといえるのではないだろうか。

参加者からのお便り

(敬称略)

○初めて出席した歴史学会、とても興味が湧きました。おそまきながら仲間に入れて頂きたいと考えております。若い学生達の参加は非常にうれしい。大きな期待がふくらみます。金子光

○先般の学会では大変ご丁寧なおもてなしを頂き有難うございました。皆様が真面目に、ずっとよい研究を続けていらしたことに敬服しました。(中略)私の話がとり止めなく、学会向でなかったことを、今更反省し、準備不足で申訳がなかったと存じております。お許し下さいませ。皆様の歴史勉強をみせて頂き、私もこれから遅まきながら勉強をしたいと思つています。大森文子

○日々、単なる業務に追われて、何かゆとり・余裕がもてない時でしたので、学会の雰囲気には圧倒され、今一度「自分」をみつめてみなければと思つきました。尾崎 千鶴(非会員)

○第九回大会に参加させて頂いて、権威主義的なところのない、アッ

トホーム的な雰囲気の中で、二日間を有意義に過ごすことができました。そして、研究頑張らなくっちゃという気持ちになりました。牟田かつ子

○GHQのもとで改革にのり出されていた皆様の話からは、女性という位置もあわせて一挙に民主化しようとしていた日本の状況が伝わり、特に印象深かったです。保助看法第五条の看護の定義誕生についても、核心に触れるようで、背すじがゾッとするようでした。

でも、日本側の逡巡に対して、アメリカがなぜアドバイスしなかったのか、していたら第五条は変っていたのか等々、聞いてみたいことが沢山でした。寺山 範子(非会員)

○第一線を離れてしまった今、我々の地位向上の為にも歴史を知り知っていないなればと思つております。伊藤文乃(非会員)

○内容は奥深く、知識のない私にはかなりハイレベルなものでしたが、看護界の大御所の方々に身近かにお目にかかれ感激でした。小原 美子(非会員)

幹事選挙の公告

八月五日の総会で、第三期幹事の改選が確認されました。これにより「日本看護歴史学会幹事選挙規則」に基づき、本会報の発行日をもって幹事選挙公示日といたします。投票期間は、発行日より三ヶ月後の一九九五年十一月二〇日（当日消印有効）までとなります。

投票用紙は同封のものを使用し、幹事に相応しいと思う会員一〇名を連記し、同封の投票所宛の封筒を使用し、無記名で郵送して下さい。よろしくお願いいたします。

◆日本看護歴史学会幹事選挙規則

第一条 日本看護歴史学会の幹事の定数は一〇名とする。

第二条 選挙人および被選挙人の資格は、幹事選挙の行われる年度に発行される日本看護歴史学会会員名簿に記載されている者とする。

第三条 選挙管理委員会は、改選の年に開催される総会の場合で会員により選出された三名の選挙管理委員によって組織される。

第四条 幹事選挙の公示は日本看護

歴史学会会報の紙上において行うものとする。

第五条 幹事選挙の投票は選挙管理委員会の規定する投票用紙を使用し、一〇名を連記し、日本看護歴史学会幹事選挙投票所へ無記名で郵送するものとする。

第六条 投票期間は会報の発行日より三ヶ月間とし、その最終日当日の消印のあるものは有効とする。

第七条 開票の結果、得票順に上位一〇名の者を幹事とする。選挙管理委員会の確認後、辞退のあった場合は高得点の者より順次繰り上げ、一〇名とする。

第八条 第一〇位の者が複数以上あった場合に限り、該当者はすべて幹事とみなすものとする。

選挙後一年を経て幹事の中から欠員が生じた場合の次点者の繰上げは原則として認めない。

第九条 幹事選挙の結果は、選挙後の最も早い時期に発行される日本看護歴史学会会報紙上に発表するものとし、幹事の承認は総会の場で行う。

第一〇条 新たに選出された幹事

は、その年度内に前任者より事務の引継ぎを行い、次年度より幹事の任務を遂行する。

附則一 本規則の改廃は総会の場で三分の二以上の支持のあった場合に成立する。

附則二 本規則は一九八九年八月二一日より施行する。

選挙管理委員会氏名

総会の場で選出された選挙管理委員は次の通り（五〇音順）

○岡田 麗江氏

岸根 滋子氏

南出 成子氏

※ 尚、年会費を三年以上滞納された方には投票用紙は送付されませんので、御諒解下さい。

看護史一口メモ ⑨

戦後GHQによる改革の一環に指導者講習会がある。一九四七年に東京第一病院で開催された時の記録によれば、平井・湯本両氏が先生側、司会は大森氏とある。

この日の研究発表は「栄養失調症について」大病院で、「栄養失調症について」「精神病について」であった。質問は慈恵医大である。これに対しての湯本氏の回答は

栄養失調は食餌が大切であつて、カロリーを計つて與へる必要がある。何か統計的な数字はありませんか。牛の骨のスープ、鰯等を與へる。症例研究の時に醫師其他の方に出て貰う。

帝大 昭和一八年頃からそれらしい症状で外来に来て終戦後に診断をつけられたものが多い。

湯本先生 1800〜2000カロリーが必要である。まづ何を食へたいかを聞きこちらで色々考へて工夫してやる。（『看護学雑誌』二巻九）

第九回大会に貴重な証言を頂いた金子先生は当時厚生省公衆保健局に、大森先生は同病院課に勤務されていたことを考えると感慨深いものがある。（か）

日本看護歴史学会会報第二二号

編集責任者 亀山美知子

発行責任者 玄田公子、岡山寧子

六〇三 京都市上京区清和院口寺町東入

京都府立医大医療技術短大部

日本看護歴史学会事務局

三〇〇 千葉市中央区広鼻一―八一―一

千葉大学看護学部

看護実践研究指導センター

鶴沢陽子気付

〇四三―二二六―二四五六